

しいのき



七十年は大昔

名誉館長 三隅治雄

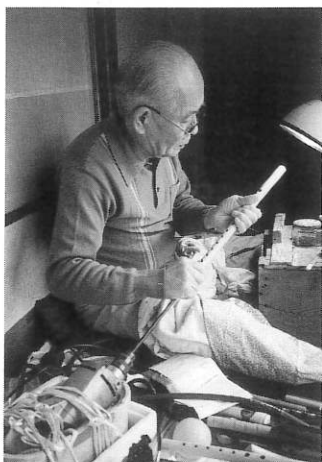
文楽や歌舞伎で上演される「一谷嫩軍記」で、熊谷次郎直実が、来し方を顧みて「十六年は一昔、アア夢だ夢だ」と詠嘆する場面があります。また、一般に十年一昔と申します。その「昔」とはいつを指すのかは人それぞれで、要は、年数に関係なく、現在の状態とはまるで異なる過去の時を振り返って、ムカシと呼ぶのでしょうか。とすれば、いまの3、40代の人から見ての中野の昔は、何時ごろの、どんな生活が偲ばれるのでしょうか。上の写真は70年前の鷺宮の農家で、人々が稲の脱穀に励んでいる風景です。当時の中野は、関東大震災の余波で人口が急増し、都市化が加速しました。それでも江戸時代以来の、江戸の近郊農村としての面影は色濃く、農業も盛んでした。早朝から田畑で汗を流し、夜は夜なべで眠い目をこすり、夏の麦打ち、冬の大根洗いの労苦を語る当時の人はまだ健在ですが、聞く青壮年には、それももはや昔話でしょう。川で泥鰌を捕った、螢を追ったなどの生活が、大昔とも思えるほどの変貌を遂げた、現代のわが町中野です。

文化財よもやま話

手作りの笛のこと

中野区鷺宮では、お囃子はやしが伝えられているほか、鷺宮囃子保存会の方々によって神楽かぐらも継承されています。萩原流の流れを汲む神楽師・菊田氏が、土地の青年に舞を始めとして、神楽囃子などを伝えました。

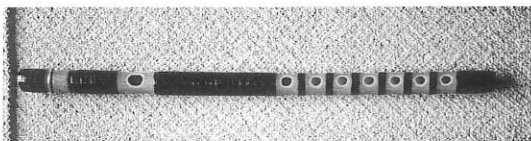
神楽囃子に用いる笛は「能管のうかん」といいます。能管はそれを用いる人が自ら作るものとされており、写真の吉田氏も菊田氏に作り方を習い、始めたそうです。



◀能管を作る
吉田正秀氏

笛作りは篠竹を探すところから始まり、行程は全て手仕事でなされます。目で見ただけでは判断のつかない微妙な作業を、手の感覚、息を吹き入れてみた時の、わずかな空気の流れなどを頼りに進めていく一連の行程は、まさに“技”の集積といえるでしょう。最後は、何回にもわたる塗装で完成となりますが、色合い・デザイン・装飾など少しずつ変化をさせて、音の追求とともに、笛の外観の美しさをも探究していきます。他地域の神楽師から高い評価を得ている笛ですが、まだまだ可能性を内包しています。

今回、吉田氏の能管が資料館に寄贈されました。



▲資料館に寄贈された能管

大地に眠る歴史

掘り出し物が村を語る

中世というのは記録がほとんどない謎の多い時代です。

明治35年(1902)、現在の松が丘一丁目25番地で、森林の開墾中に板碑が十数枚出土しました。板碑とは俗に秩父の青石と呼ばれる緑泥片岩で造られた卒塔婆です。中央に阿弥陀如来を示す梵字が刻まれ、極楽往生を願うためと、ときには墓石として立てられたものです。鎌倉時代から室町時代に流行し、村落のはずれに場所を設けてまとめて立てられていたことが、各地の発掘調査によって明らかにされています。

松が丘で発見されたものも十数枚という数から考えて、恐らく、このようなまとめられていた場所であった可能性が高いものです。このように見えてくると、この場所の付近には当時、村落があったことが確実に予想することができます。

この時、発見された板碑は現在4枚だけが現存しています。それぞれの年号を見るといずれも應永年間(1394~1428)のもので、この時に確実に付近に村落があったことが証明されたのです。



この頃、このあたりは広義の江古田に属すると考えられますが、江古田という地名が記録上、はじめて出てくるのは江古田原沼袋合戦のあった文明9年(1477)ですので、それ以前から存在しているこの村落は目下、江古田で最古の村ということができましよう。

文献記録にもない事実を、このもの言わぬ掘り出し物が教えてくれたのです。

古文書つづり

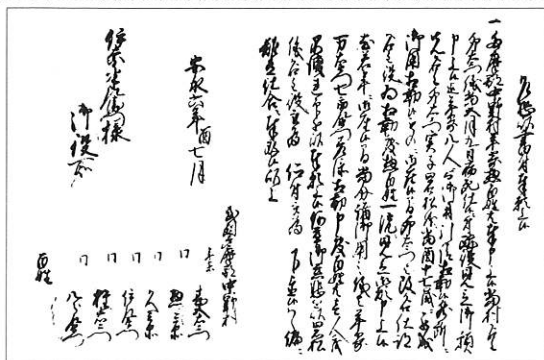
おそろおそろのお願い書(?)

小さくて読みづらいのですがこの史料を読んでみましょう。

1～2行目で名主卯右衛門が病死したとあり、以下、その子が17歳で名主に就けるので父卯右衛門の名を継いで名主に就任する許可を百姓一同がお願いする、とあります。

文書のなかでは、タイトルの「乍恐（おそれながら）」を始め「御願申上（お願い申しあげ）」「何卒御慈悲を以（なにとぞご慈悲をもって）」「偏_二難有仕合_一奉存（ひとえにありがたき幸せに存じ奉り）」等とかなりへりくだった表現がみられます。

ここに当時の役所と村との力関係が表れているのですが、その一方でこういう書き方は決まり文句の様なものだという側面もあります。実際に役人が村政に口出しすることはあまりなくほとんど



▲安永6年伊奈半左衛門役所宛名主跡役願

が村人まかせでしたので、人事などは村内の決定が事実上最終決定という性格がみられます。この文書はそういう意味では形式的なものとしてよいのではないのでしょうか。

当時の人は、私達が手紙に「拝啓……敬具」と書くのと同じ様な感覚でこういった文句を書いていたのかもしれませんが。

安永6年は1777年。伊豆大島の三原山が大噴火し、安永8年まで続く。原文書ではこの後の部分で「百姓」の具体的な名前が列挙されていたと思われるが、現存しない。

中野往来

まさつぐ
井上正継・井上家代々の墓
上高田4-10-1 願正寺墓域内

井上正継は、通称を外記^{げき}、九十郎といい、江戸時代前期の砲術家で、井上流（外記流）の創始者です。慶長19(1614)年から二代將軍徳川秀忠に仕え、大阪の陣などに赴き、銃の名手として手柄をたてました。

寛永12(1635)年には、それまでは重くて的中率の悪かった大筒を改良し、南蛮の銅を用い、従来^{しん}の10分の1の重さで、的中率の高い大筒を作りあげました。この大筒は、3貫目(約11.25kg)の弾を40町(約4.36km)も飛ばす事ができ、飛距離も3倍以上に伸びました。また、寛永14(1637)年の島原の乱に際しては、かねてから考案していた大小の鉄砲などを製作して、献上しています。

このように様々な工夫をし、職務を精勤したことが認められ、寛永15(1638)年には幕府の御鉄砲方に任ぜられ、与力5人、同心20人を預けられま

した。御鉄砲方は、元和年間(1615～1623年)に初めて置かれ、慶応2(1866)年まで続いた役職で、若年寄の支配下で、砲術及び大筒をはじめとする鉄砲に関する事柄一切を司りました。

正継は、正保3(1646)年9月、同役の稲富直賢^{いなのひらなほ}と砲術の事で口論となり、それがもとで直賢と長坂信次を斬り、正継も居合わせた者に斬られ、命を落としました。(直賢の墓は上高田の松源寺)

そのため、小姓組に属していた正継の養子正景は改易され、井上家は一時断絶しました。しかし、

正景は寛文3(1663)年に許され、寛文6(1666)年には御鉄砲方を命ぜられました。御鉄砲方は、寛文6年以後は、井上氏、田村氏の世襲となり、それ以降、幕末に至るまで、井上家は御鉄砲方を勤めていきました。



事業報告

各種事業経過

1996年4月～6月

事業名	内 容	期 間
企 画 展	「五月人形展」 館蔵品展「うつりゆく四季と暮らしー農村の昔ー」	4/23～5/31 6/27～
史跡めぐり	「江古田コース」 講師 財津哲夫氏(前中野区立歴史民俗資料館主任研究員)	4/20
歴 史 講 座	考古学でみる関東謎の中世史 「解明進む小田原城」 講師 大島慎一氏(小田原市教育委員会学芸員) 「葛西城をめぐる諸問題」 講師 谷口栄氏(葛飾区教育委員会学芸員)	6/22 6/29
文化財調査	鷺宮地区民俗調査 調査報告書刊行作業 新井・上高田地区民俗調査	継続中 6/25～
埋蔵文化財調査	北原遺跡(野方3丁目) 調査報告書刊行作業 御嶽遺跡(江古田1丁目) 第二次発掘調査	継続中 継続中



▲北原遺跡視察風景

寄贈資料一覧

1995年7月～9月
敬称略・受入順

資料名	点数	氏 名
羽子板 ほか	3	宮本 喜世
書籍	1	日本自動車工業会
戦争関係資料	26	斉藤 久子
戦争関係資料	2	高砂清三郎
書籍	2	坂本 和恵
罹災証明書 ほか	7	小林 正雄
衣料切符 ほか	3	小山 欣延
人形	1	安岡 郁夫
ラジオ ほか	8	小島義三郎
パン焼器	1	小池 敏郎
金鷄勲章 ほか	一式	都築不二夫
弁当箱	1	佐々木誠治
修了証書 ほか	2	三宅 朝昭

◎貴重な資料をありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

NEWS

企画展開催中

館蔵品展

「うつりゆく四季と暮らしー農村の昔ー」

季節の流れにあわせて展開される農村の生活を展示で再現します。



小学生を対象とした
展示コーナー／平成
7年度の新収蔵資料
の展示もあります。
8月31日(木)まで。

◀富士講関係資料

入館状況

1996年3月～5月(延76日間)

(人)

一 般	社教団体	学校教育	合 計
10670	402	1114	12186

発行年月日 1996年7月1日

編集・発行



山崎記念

中野区立歴史民俗資料館

〒165 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119

(印刷物登録番号 8 中教社第4号)